



クルニク城、Stanisław Nowaki 撮影、2005

## クルニク城

ポズナンの南 25 キロほどのところにある人口約 6,800 の小さな町クルニク Kórnik の中心部にある城は、堀に囲まれ、その水面に姿を映す壮麗な建造物で、観光の名所。1452 年に豪族ミコワイ・グルカ Mikołaj Górka がこの城を建て、その孫でポズナンの県知事のスタニスワフ・グルカが 16 世紀の後半にルネサンス様式に城を改造した。スタニスワフは、グルカ家の最後の男性だったため、彼の死後クルニク城は何度か所有者が変わり、1676 年にチャウインスキ家の所有に帰した。

18 世紀のクルニクの城主は、テオフィラ・チャウインスカ Teofila Działyńska (1714–1790) で、「白い貴婦人」の異名で民間によく知られている。

テオフィラは、クルニクの領主ズィグムント・チャウインスキを父としテレサ・タルウォを母として 1714 年 11 月 26 日にクルニクに生を享けた。7 歳の時、父を亡くし、11 歳の時、母にも死なれて、孤児となった。彼女の幼年時代と少女時代については情報が無く、その後、結婚までの 7 年間をどこでどのように過ごしたかは、まったく不明である。

1732 年にチェムピンの領主の息子ステファン・ショウドルスキ Stefan Szoldrski に嫁ぎ、夫婦でチェムピンに住み、三人の子をもうけたが、子どものうち 1736 年生まれの子フェリクスだけが生き延びて、のちにノヴィ・トミシル Nowy Tomyśl の町の創設者となる。

テオフィラの最初の夫は 1737 年に死亡。1743 年にテオフィラは再婚。二度目の夫のアレクサンドル・ポトゥリツキは、テオフィラよりも 8 歳若く、彼の所有地は妻のそれよりもずっと小さかった。その故か、この結婚においてはテオフィラが支配的立場にあり、結婚生活はうまく行かず、1754 年には離婚にいたった。以後、テオフィラは、独身生活を続け、クルニクとルノヴォ・クライェンスキの所有地と財産の管理運営の仕事に専念した。

# クルニク城の「白い貴婦人」

## 女傑テオフィラ

テオフィラはクルニク城を所有するチャウインスキ家の傑出した代表者だった。18 世紀後半のポーランド国家の全般的な凋落の時代にありながら、テオフィラは、クルニクと隣接のブニン Bnin の町を繁栄に導いた。

テオフィラがこの事業を達成できたのは、とりわけプロテスタントのドイツ人の入植者たちの集落を町にまで発展させたことと、ユダヤ人を支援したことによる。信仰を異にする異邦人を援助したことでテオフィラは中傷誹謗にさらされたが、彼女は動じなかった。ブニンの町にルター派のプロテスタント教会と町庁舎を建立し、またクルニクの教区教会(カトリック)の改築を行なった。

1740 年には所有地における賦役と現物での年貢を小作料に替えた。クルニク湖にダムと堤防を築き、道路を敷設し、風車、水車を建設した。この事業の達成によりクルニクはかなり大きな町に発展し、近くのシレムやシロダ・ヴィェルコポルスカを上回る町となり、1793 年のポーランドの第 2 次分割後はシレム郡の暫定的郡庁所在地とさえなった。

テオフィラは、文化問題にも強い関心をいっていた。ベルリンの王室図書館と交渉を持ち、《Journal encyclopedique 百科事典雑誌》を予約購読していた。建築様式や美術の新しい時代傾向に敏感で、クルニクの居城をバロック様式に改築し、庭園をフランス風に造園した。

## 「白い貴婦人」の肖像

テオフィラは、1790 年 11 月 26 日に世を去り、クルニクのカトリック教会の地下納骨堂に葬られた。享年 76。テオフィラのクルニクの町の発展に対する功績については議論の余地が無いにもかかわらず、テオフィラは、すでに生前からとかく口さがない世間の噂に囲まれていた。寡婦は複数の男たちと不倫関係にあり、とくにクルニクのカトリック教会の教区司祭やブニンのルター派教会の牧師との関係が取り沙汰された。

テオフィラの死後、現在クルニク城の食堂の壁を飾っているテオフィラの純白のロングドレスに身を

# 「婦人」の幽霊伝説

栗原 成郎

包んだ肖像画「白い貴婦人」が、19世紀にはいると、幽霊伝説の源泉となった。

夜の12時少し前になると、テオフィラは、肖像画から抜け出して、ひらひらする白いロングドレスの裾を手で押さえながら、玄関口に出て、庭園へ向かう。12時になると、黒馬に乗った騎士が駆けつけてきてテオフィラと落ち合う。騎士は、テオフィラを黒馬に同乗させて並木道を駆け、二人は闇の中に消える。一番鶏が鳴くと、いつのまにかテオフィラは肖像画の額の中に戻っている。

「白い貴婦人」の幽霊伝説の起こりは、テオフィラが夕方しばしば公園を散歩したことが契機となっているらしい。テオフィラは、厄介な偏頭痛に悩んでいた。その痛みを和らげるために、彼女は自分の趣味に合わせて造らせたフランス風の庭園の中で時を過ごすことを好んだ。



クルニク城の「白い貴婦人」  
テオフィラ・チャウインスカの肖像  
Antoine Pesne (1683-1757) 画、1754

テオフィラをランデブーに誘う黒馬の騎士の正体は不明であるが、この夜の騎馬遊行は、クルニクの湖畔にあった中世の古い館の廃墟の伝説と結びつけられている。現在のクルニク城の近くに、ひと昔前にクルニクの領主であったグルカ家の狩猟

用の館が廃墟として残っていた。グルカ家は、権勢をふるった豪族で、莫大な財宝を狩猟館に隠していた。スタニスワフ・グルカの死後、その財宝は悪霊たちが護っていた。狩猟館は時の経過とともに廃屋と化していったので、町の住民たちがその財宝を手に入れたと思うのも不思議ではなかった。しかし、財宝の守護者の悪霊が他人の侵入を許さなかった。

クルニクの古文書は、テオフィラが領地の管理運営の能力に長けた理財家であったことを伝えているが、ある日、大火が生じて町の大半が灰燼に帰した時、グルカ家の廃屋と化した狩猟館の解体をテオフィラが命じ、取り壊して残った煉瓦を罹災した町民に分配して、その後の火災に備えてその煉瓦で各戸に煙突を建てさせたことを領主の英断として記している。

伝説によれば、グルカ家の財宝の守護者であった悪霊が、狩猟館解体による昔のグルカ家の財宝の雲散を恨んでその行方が明らかにされる時まで、テオフィラに夜の公園をさまよひ続けさせることによって復讐しているのだという。

クルニク城にはチャウインスキ家によって収集された選りすぐった蔵書と美術品の膨大なコレクションがあり、現在それらはポーランドアカデミーの管理下にある。

2012年秋にクルニクを訪れた際、「白い貴婦人」の幽霊伝説については、購入した案内書『クルニク城』にも記述はなく、専属ガイドによる説明においても触れられることはなかった。

〈参考文献〉

Zamek w Kórniku – Przewodnik. Wydawnictwo ZET. Wrocław 2011.

Bogna Wernichowska, Maciej Kozłowski. Duchy Polskie. Wydawnictwo PTTK. „Kraj” Warszawa, 1983.

\* くりはら・しげお 1934年2月21日東京都目黒区生まれ。

北海道との縁は、船舶会社勤務の父親の転勤により1949-52年小樽潮陵高校で学んだのが最初。その後、二度目の縁で北海道大学文学部に勤務(1992-97)。その時代が楽しかったので、三度目、2007年より札幌に移り住む。

ポーランドとの縁は日本との学术交流によりワルシャワ大学に勤務(1976-77)したことによる。

東京大学名誉教授。



《ポーランドの伝説》

## 黒衣の公爵夫人の幽霊伝説

栗原 成郎

シャモトウウィの「黒衣の公爵夫人」の幽霊伝説は、同じヴィエルコポルスカ地方のクルニク城の「白い貴婦人」の伝説と好一対をなす(本誌第87号参照)。

シャモトウウィ Szamotuły はポズナンの北西35キロ、人口1万9千ほどの小さな町で、中心部の公園のシヴィエルチェフスキ通りに「ハルシュカの塔 Baszta Halszki」と呼ばれる煉瓦造りの高い建物がある。中世に権勢を誇った豪族の城の名残の一つである。城は1513年にポズナンの県知事ウカシュ・グルカ2世 Łukasz II Górką (1482-1542)の所有に移り、1518年にグルカはこの塔を住居兼防衛塔として建造させた。

のちに、この塔の近くで夜ごとに若い黒衣の貴婦人の姿が見られるようになったという。

第二次大戦が終って間もなく、シャモトウウィの古い住民の一人ピョートル某(なにがし)という男が、ポズナン市への出張の帰り途、夜の11時ころ塔のそばを通ると、月の光に照らされて女の姿が浮かび上がった。女は黒のラシヤの喪服を着てゆっくりと池の方角へと歩を進めていた。女がひとり公園を散歩する時刻ではなかったの、彼は驚いた。若い女性のように、どこかへ急ぐ様子もなかった。不思議に思って立ち止まると月が雲に隠れ、再び月が現れたときにはもはや誰の姿も見えなかった。

家に帰ってこの出来事を妻に話すと、妻は少しも驚かず、ただ感慨深げに、それは子どものころ話に聞いた、有名なハルシュカに違いないと言った。ピョートルの妻の両親と祖母は、特に秋、塔の周囲を歩き回るハルシュカの幽霊を何度も見たという。また塔の中から溜息と呻き声が聞こえてくるという話も聞いていた。

Jan Matejko (1838-1893) 画「スカルガの説教」(1864)より：右が若いハルシュカとされるが、画題はズィグムント3世(1566-1632)時代の出来事でハルシュカの没後であり、時代錯誤があるとも言われる。



シャモトウウィには黒衣の公爵夫人の話がさまざまなヴァージョンで伝えられている。

若い公女は御付きの小姓が好きになり、立腹した父親が娘に鉄仮面をかぶせて塔に閉じ込めたともいう。あるいは公爵夫人は不貞の妻ではなかったのに、姦通罪で残酷な刑罰を受けたともいう。

最もよく知られた伝説では、嫉妬深い夫のウカシュ・グルカ3世 Łukasz III Górką (1533-1573)が、美貌の若い妻を自分以外の男に見られないよう、妻の顔に鉄仮面をかぶせて塔に監禁したという。

ハルシュカは仮面で顔を覆ったまま地下の回廊から塔を出て、近くの教会のミサに参加し罪を告解した。陰鬱な月夜には塔の近くを告解用の衣装に身をつつんだ女が音も無く歩く姿が見られ、女が塔に姿を消すと塔の厚い壁越しに、薄幸のハルシュカの押し殺した忍び泣きの声が聞こえたという。

ハルシュカ Halszka の愛称で知られる女性は、エルジュビェタ・カタジナ・オストロクスカ Elżbieta Katarzyna Ostrogska (1539-1582)といい、公爵イリヤ・オストロクスキ Ilija Ostrogski (1510-1539)とベアタ・コシチェレツカ Beata Kościelecka (1515-1576)の娘であった。オストロクスキ家は14世紀末から16世紀にかけてリトアニア大公国で枢要な地位を占めた大貴族の一門で、西ウクライナのヴォルィニのオストロク(ポーランド語 Ostróg、ロシア語 Острок)に居城を持ち24の都市を支配した。父イリヤはリトアニア・ポーランド連合王国内の広大な領地を治めていた。

才色兼備で知られた母ベアタは王室財務官アンヂュジェイ・コシチェレツキ Andrzej Kościelecki と宮廷女官カタジナ・テルニチャンカ Katarzyna Telniczanka の娘であったが、ズィグムント1世(老王) Zygmunt Stary (1467-1548)の婚外子であることは公然の秘密とされた。ベアタは老王の2番目の妃ボナ・スフォルツァ Bona Sforza (1494-1557、イタリア出身)に女官として仕えた。

ハルシュカは1539年にオストロクで生を享けたが、誕生前に父親は亡くなり、それが彼女の悲劇



ハルシュカの塔(左)とグルカの館  
Photo: Stanisław Nowak, 2007

的運命の因(もと)となった。娘は16世紀西ヨーロッパのいくつかの公国よりも強力なポーランド・リトアニア連合王国の中でも、最大の侯国の一つである領地の莫大な資産の相続人となった。父イリヤは自分の死の近いのを予期して、生まれてくる子の正当な後見人に叔父[イリヤの腹違いの弟]のワスィル・オストロクスキ Wasył Ostrogski (1526-1608)とズィグムント2世アウグスト王 Zygmunt II August (1520-1572)を指名した。父の早すぎた死の後に生まれた女兒は絶世の美女に成長し、近隣の数多い分封侯国のどれにも勝る莫大な財産の相続人というおとぎ話のお姫様のような存在だった。

当然、ハルシュカには求婚者の群れが殺到した。中でも最も熱心な求婚者は、姫の後見人ワスィル・オストロクスキの甥、若き候ディミトル・サングウシュコ Dymitr Sanguszko だった。姫はまだ14歳で、母親のベアタはいったん求婚者に与えた結婚の約束を取り消した。だが若い候は結婚を断念する気は毛頭なく、後見人たる叔父のワスィルと共に80人のコサクを引き連れてオストロク城を攻撃した。短い小競り合いののち城は明け渡され、ディミトルは婚約者の前に立った。急ぎ呼ばれた司祭が即席の結婚式を執り行い候と姫を結び、ワスィル公が結婚の証人になった。1553年9月6日のことだった。

しかし母ベアタはこの既成事実を承認せず、ズィグムント・アウグスト王に苦情を訴えた。ハルシュカの後見人でもある王は激怒し、ディミトルに「死刑と名誉剥奪」を言い渡した。夫は若妻を連れてボヘミアに逃亡したが、別の求婚者マルチン・ズヴォロフスキ Marcin Zworowski が一族郎党を率いて二

人を追跡し夫を殺害した。

ハルシュカはポーランドに連れ戻され、ズヴォロフスキはハプスブルク家の主権を犯したかどで神聖ローマ帝国の官憲に逮捕・投獄された。ポーランド王の直接干渉により彼も帰国はできたが、時すでに遅く、王は若き未亡人の再婚の手筈を整えていた。

ハルシュカのつぎの嫁ぎ先は、ヴィエルコポルスカの大貴族、ポズナンの知事でシャモトウウィの領主ウカシュ・グルカ3世だった。結婚式はワルシャワの王宮でポズナン司教の司式により盛大に挙行されたが、母と娘はこの王の独断専行に不服で、ルヴフの修道院に身を隠し、おそらく母親の意志で娘はリトアニアのスツキ公シエミョン・オレルコヴィチ Siemion Olelkowicz と再婚した。

これに感情を害したズィグムント・アウグスト王はハルシュカを修道院から連れ出すよう命じ、法律上の夫に引き渡した。グルカは妻をシャモトウウィに連れ帰り、彼女は1559年から1573年までそこに留まったが、王が死に夫にも先立たれると、父方の叔父ワスィル公の手で故郷ヴォルニニへ戻された。

ハルシュカは母の強い影響下にあり、徹頭徹尾母に従順な娘だった。その母も3年後に世を去る。

さらに6年後、ハルシュカは狂気のうちに43歳の生涯を閉じた。彼女の精神錯乱は三度の不本意な結婚に翻弄された悲劇的な体験に起因すると考えられる。ハルシュカの不幸な運命は、宮廷につながる母親ベアタ、叔父ワスィル公、ズィグムント・アウグスト王らの間の反目、権力争い、巨万の財産をめぐる葛藤の結果であった。(くりはら しげお)



## ポーランド情報誌『エクセレントポーランド～ライジングポルスカ～もっと知りたいポーランド』3発行

ポーランド共和国大使館が全面協力した、好評のポーランド情報誌(シルバーストーン JP 刊)の今号には、東京・ワルシャワ直行便が就航した LOT(ロット)ポーランド航空のプロモーションのほか、文化面では昨年開催された第17回ショパン国際ピアノコンクールにちなんでショパン、およびタデウシュ・カントル生誕百年の特集や、シロンスクの「ヨーロッパ産業遺産の道 ERIH」が紹介されています。

今年ワルシャワで開催される「世界女性サミット」と、クラクフで開催される「ワールドユースデー」に先駆け、両都市を舞台とした大変興味深い記事もあります。

また、高円宮妃殿下、中曽根弘文(参議院日本・ポ

ーランド友好議員連盟会長)、額賀福志郎(衆議院日本・ポーランド友好議員連盟会長)、遠藤郁子(ピアニスト、当会会員)氏らも紹介されています。

本体 1,500 円。お求めは紀伊國屋書店、版元等へ。

なお、本号でも紹介されているポーランド国立民族舞踊団「シロンスク」の DVD が、ポーランド広報文化センターより当協会に寄贈されました。ご利用ください。

(尾形芳秀)



# 錬金術師センディヴォギウスの亡霊

栗原 成郎

センディヴォギウスという奇妙な名のポーランド人の錬金術師に興味をいだくようになったのは、渋澤龍彦の『黒魔術の手帖』(初版は桃源社 1961 年、後に河出文庫)に収められた「薔薇十字の象徴」という文章を読んだ時からである。渋澤の文章は、卑金属を金に変えるいわゆる「哲学者の石」(あるいは「賢者の石」)lapis philosophorum を所有しているスコットランド出身の錬金術師アレクサンダー・シートン Alexander Seton が、錬金術の秘密を訊き出そうとしたザクセン選帝侯クリスティアン II 世のために投獄され、拷問を受けていたのを、センディヴォギウスによって救出され、そのお礼に死ぬ前に「哲学者の石」を命の恩人に譲り渡したところで終わっている。その話の前後を知りたくなったのである。

ヨーロッパに名を知られた錬金術師ミカエル・センディヴォギウス Michael Sendivogius は、16 世紀後半から 17 世紀前半に数奇な運命の人生を送ったミハウ・センヂヴィ Michal Sędziwój というポーランド人で、1566 年にポーランド南部山岳地の町ノヴィ・ソッチ Novi Sącz (現マウオポルスカ県)近郷のウコヴィツァ Łukowica に由緒ある貴族の息子として生まれた。幼年期のことはほとんど知られていないが、神童の誉れ高く、成人前にクラクフのアカデミーに入学。当時のクラクフ大学では、多くのヨーロッパの大学と同じように、錬金術が非公式ながら科学の一部門として研究されていた。センヂヴィはこの分野に興味をもち、化学の研究に励んだ。

彼の才能は大貴族で有力な政治家ミコワイ・ヴォルスキ Mikołaj Wolski (1553-1630) の目に留まり、自身も錬金術の研究家だったヴォルスキは彼の研究を支援した。1588 年ころ彼はヨーロッパ遊学の旅に出る。その費用は、プラハに居城をもつ神聖ローマ皇帝ルドルフ II 世(在位 1576-1612)の宮廷とつながるヴォルスキの援助によったと思われる。ヨーロッパ遊学中、センヂヴィは当時一流と言われた錬金術師たち—ジョン・ディー John Dee (1528-1608)、エドワード・ケリー Edward Kelley (1555-95)ら—を歴訪し、彼らから知識を汲み取り、化学的処理法のレシピや手稿を買取った。彼はライプツィヒ、ウィーン、アルトドルフの諸大学でも学んだ。

センヂヴィの生涯に起こったミステリアスな挿話として、渋澤が紹介しているのが錬金術師アレクサンダー・シートンとの出会いである。シートンは、錬金

術を疑問視するフライブルク大学教授のヴォルフガング・ディーンハイムとバーゼル大学医学教授ツウインガーの面前で、るつぽに鉛と硫黄を入れて炉の火にかけて熱し、そこに少量の粉末を入れて鉛と硫黄の溶液を純金に変えて見せ、卑金属を金に変成させる秘密を知っているとして、ザクセン選帝侯クリスティアン II 世によって捕らえられていた。選帝侯は「哲学者の石」製造の秘法について口を割らせようと、シートンを鉄の串で刺す、焼き鑊(こて)を当てるなど、むごたらしい拷問にかけた。センヂヴィはアルトドルフで勉学中にシートンの知遇を得たようで、彼の苦境を知って選帝侯の都ドレスデンに赴き、その出獄の手助けをした。センヂヴィがどのような方法で彼を救出したかは伝えられていないが、おそらく、自分の後ろ楯であるヴォルスキや皇帝の力を借りたのであろう。シートンは救出に感謝し、センヂヴィに「哲学者の石」と思える粉末を1オンス贈ったという。その後まもなくシートンは拘禁と拷問が原因で衰弱死した。伝説によれば、センヂヴィは彼の若い未亡人ヴェロニカと結婚した。

その後、センヂヴィはルドルフ II 世の招聘に応じてボヘミアに赴き、プラハ城内でシートンから譲られた粉末を用いて実験を行ない、錬金術の賞賛者である皇帝を納得させるに十分な成果を見せた。そのことは、皇帝が《Faciatur hoc quispiam alius, quod fecit Sendivogius Polonus》(ポーランド人センディヴォギウスが為したることを他の者も為さんことを)というラテン語の銘を刻んだ大理石板を王宮の壁に設置させたことから確からしい。センヂヴィが用いたシートン秘伝の魔法の粉末は、金メッキを可能にする一種の化合物であったかもしれない。センヂヴィは 1590 年代から 1600 年代初めに皇帝の庇護のもとにプラハで活動し、ほぼ同時期にポーランド王ズィグムント III 世 Zygmunt III Waza (在位 1587-1632) の宮廷にも出入りした。

1605 年センヂヴィはヴェルテンベルク Württemberg 公フリードリヒ I 世の招きでシュトゥットガルトに赴いた。公は錬金術に異常な関心を持ち、多くの錬金術師をか



ミハウ・センヂヴィ  
Łuszczkiewicz 画、  
1862

かえ、シートンもかつてその宮廷にいた。公のお気に入り  
の錬金術師ヨハン・ミュラー・フォン・ミュレンフェルス  
Johann Müller von Mühlenfels は、おそらく公と結託して  
センヂヴィイの秘密の粉末を手に入れるため陰謀を企てた。  
センヂヴィイは城の塔に幽閉され、彼の粉末を納めた箱を  
はじめ貴重な所有物はすべて没収された。センヂヴィイは  
(おそらく監禁者側の念入りな仕掛けにより)脱走して、  
自分の災難をルドルフ II 世とズィグムント III 世に訴えた。  
公はその圧力に屈し、陰謀の元凶ミュレンフェルスは  
裁判にかけられ絞首刑に処せられた。

これらの事件の後、センヂヴィイはポーランドに帰り、  
錬金術に異常な関心をもっていたズィグムント III 世の  
信頼を得て王室秘書官となり、錬金術の研究に専念した。  
ヤン・マテイコは、センヂヴィイが王の前で錬金術の技を  
示している場面を描いている。



錬金術師センヂヴィウゴウス  
Jan Matejko (1838-93) 画、1867

しかし時とともに王との関係は冷えこみ、センヂヴィイ  
はヴォルスキから資金援助を得てその領地クシェピツェ  
Krzepice (チェンストホヴァの西北) に実験室を建設し  
錬金術の研究を続けた。金製造の成果は見られなかったが、  
彼の研究は中央ヨーロッパにおける冶金工業、化学工業の  
基盤を築くことになった。

その後センヂヴィイはポーランドを去り、神聖ローマ帝国  
の新帝フェルディナント II 世 (在位 1619-37) の顧問官  
となり、ウィーンとワルシャワとをつなぐ外交官的な働きを  
し、またシレジア (シロンスク) における皇室用の銅、鉛の  
採鉱場の建設を指導した。皇帝に尽くした政治的貢献により  
クルノフ公爵領に領地を下賜され、クラヴァジェ Kravaře  
(現在のチェコ共和国東端) に住み、1636 年そこで世を  
去った。

センヂヴィイはパテン師的な錬金術師ではなく、硝石が  
加熱される時に放出される酸素の存在に最初に気づいた  
化学者として評価されている。

当時の中欧の支配者たちはセンヂヴィイに金を創り出す  
夢を託したが、彼の故郷ポーランドのノヴィ・ソンの町民  
は、今も黄金出現の見果てぬ夢を見る。毎年、大晦日の  
深夜、大学教授の講義用ガウンに身をつつんだセンヂ  
ヴィイは、ノヴィ・ソンの旧市街を悠然と歩きながら自  
分のまわりに金貨を振りまく。地面に落ちる金貨の音は  
聞こえるが、錬金術師の姿は月夜にも影を落とさない。  
センヂヴィイの亡霊を見た人は幸運に恵まれた素晴らしい  
年を迎えるという。(くりはら しげお)

### “Grill”シーズン

近ごろポーランドでは、五月から夏の終わりにかけて  
“grill”をするのが流行っています。“Grill”は“バーベ  
キュー”を意味する新しい外来語です。親しい者同士が  
庭に集まり、食べたり飲んだりしながら、暗くなるまで  
語り合います。私たちがイエズス会の神父さんたちから  
修道院の中庭での“grill”に招待されました。

w skwarze południa  
nad koszem z owocami  
latają osy

灼ける午後  
果実の籠に  
飛ぶ蜂や

ボズナン市、津田モニカ  
Monika Tsuda, Poznań

dźwiękami grzmotu  
deszczu i wiatru śpiewem  
gra nawałnica

かみ鳴りと  
風雨の歌で  
嵐奏(ひ)く

ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ  
Piotr Wrzeciono, Warszawa

年寄れば少し丁寧花を見る  
暗闇にをんな差し出す冷奴  
雁帰る人生軽みカルパッチョ

岩見沢市、霜田千代磨

